



中社鳥居前と横大門通りの街並み（宝光社地区と戸隠連峰の写真共に「まちづくり協議会」提供）

中社・宝光社地区が「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、本年二月二十三日、文化庁の告示がなされました。

この制度は、昭和五十年の文化財保護法の改正によって発足したもので、城下町、宿場町、門前町など全国各地に残る歴史的な集落・町並みの保存を図ることが目的とされます。

戸隠地区は、標高一〇〇〇m以上の高地に展開し、戸隠神社を中心とした七十七・三ヘクタールに亘る「高距（標高が高いの意）信仰集落」で、宿坊群としては全国で初めての選定となりました。

選定に向けて長野市と地区内の住民で構成された「まちづくり協議会」が中心となり、様々な研修会、まちづくりの先進事例の視察等を重ね、地区の伝統的建築物の保存に向けての住民の同意のもと申請がなされました。

キリスト教の修道院や比叡山、高野山のように宗教者たちが、世間と隔絶された施設を中心に修行を行うということがイメージされることと思いますが、戸隠

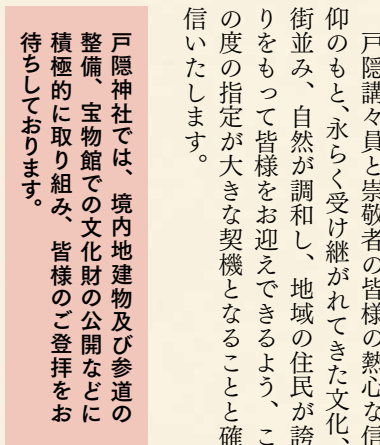
は、山岳修験道の聖地としての一面のほか宗教者以外の生活の場としての集落からなり、全国的に見ても稀有な存在であると言えます。

歴史的には、古くからの戸隠信仰のもと、近世以降、信州を中心として各地に形成された戸隠講の参詣者のための宿坊が発展し、国内有数の宗教施設である善光寺へ戸隠道で結ばれ、戸隠・善光寺両詣での信者も増加するなど宿坊の大規模化が進みました。

ここでは、江戸時代（戸隠が顕光寺という寺院だった時代）以来の地割が保たれ、門前町の中心をなす神社、旧別当家（寺務を統括する長官）・宿坊が、石垣、生垣、そして在家と呼ばれる農家、職人等の住宅等と一体となって歴史的風致を形成し、我が国にとって価値が高いものとして評価されています。

具体的には、中社と宝光社の境内及び宿坊群を中心とする門前町と、両社を繋ぐ道（神道）などをその範囲とし、共に仁王門跡の内側の参道沿いに宿坊群が、仁王門跡の外側から宿坊群の周縁に在家の住宅が景観をなします。それぞれの住宅は、元は茅葺、平入を基本とし、雪対策として軒を深くとり（せがいで造り）、床を高く張る形式を残しており、宿坊は客殿部と庫裏部からなり、その多くは客殿部正面に向拝を設け、神前の間では現在も戸隠講の参詣者のための祈禱が行われています。庭園では高地の

宝光社社殿 当神社内で唯一の江戸期の造り



宝光社地区と戸隠連峰

特色でもある様々な高山植物の姿を目にすることができま。

宝光社地区は、終戦直後と昭和四十五年の二度にわたる大火により、多くの宿坊、在家が被災しましたが、江戸以来の地割を維持したまま復興されました。

重伝建地区指定を受け、歴史的に価値のある街並みを伝承すべく、地域住民が一体となった魅力ある街並みづくりが期待され、訪れる人々がリラックスでき、安らぎを感じていただけるよう、茅葺屋根の補修や電柱の地中化、看板の規格化、イラストマップの作製等の事業が計画されております。

※あをがき（青垣）とは切り立った険しい山が垣根のように連なる様子。当社では祝詞の中で「青垣成す戸隠山の麓に鎮まり坐す戸隠神社」と用います。

戸隠中社・宝光社地区

「重要伝統的建造物群保存地区」に選定

あをがき

青垣

平成29年[春夏号]

戸隠神社発行

〒381-4101

長野県長野市戸隠3506

026-254-2001

<http://togakushi-jinja.jp>

戸隠神社

戸隠 去来抄 第六回

親鸞聖人の戸隠参詣

慶応四年（明治元年・一八六八）明治新政府が神仏判然令を發布するまで、戸隠神社は「戸隠大権現」或は「戸隠山顕光寺」と寺号を用い、長年に亘り神仏習合の状態でした。

戸隠山中では、修験者が抖擻、籠山などの行を盛んに行っていました。そうした時代、越後直江津に流罪となっていた親鸞聖人が、赦免された後に戸隠山を参詣したと伝えられています。

親鸞聖人

浄土真宗の宗祖。承安三年（一一七三）誕生。父は公家「日野有範」。九歳で出家得度、天台宗の比叡山延暦寺で二十年間修業。二十九歳の時、叡山を下り、「本願念仏こそすべての人を救う法である」と説く法然上人（浄土宗の祖）の弟子となりました。

この教義は、「南無阿弥陀仏」と称えさえすれば、極悪犯罪者が優先して極楽往生できるのだとの解釈も可能で、当時の仏教界には「社会秩序を乱す恐れあり」との危惧があり、弟子の一部の戒律無視や信者による悪事の噂の影響も重なり、建永二年（二〇七）専修念仏停止という後鳥羽上皇の院宣が下りました。破戒の弟子は斬首の刑に、僧籍をはく奪された法然は土佐へ（老齢の為、実際は讃岐）、同じく聖人は越後（新潟県）直江津へ流罪となりました。聖人は、四年後の建暦元年（二二二）赦免となり、建保二年（二二四）常陸（茨城県）へ、十



伝 親鸞聖人尊像 戸隠を訪れた四十歳ころのお姿と伝わる。（中社 武井家蔵）

二十年を経て（年数諸説）京都へ帰りました。法然からの教えを人々に伝えていただけで、自らが開宗したという意識のない聖人は、非僧非俗のまま、自らの寺を欲することもなく、弘長二年（二六二）九十歳にて入滅。浄土真宗教団と寺院を現在に近い形にしたのは、後の第八世蓮如などでした。

戸隠参詣の背景

戸隠山は岩戸開きにご功績のあった神々と共に、水の神として絶大な霊力を持つ九頭龍大神が鎮まる霊山です。戸隠山を源流とする鳥居川は、やがて信濃川となり大地を潤し、生命を育む。故に越後の人々は古来より戸隠参詣をしてきました。

しかし、当時の旅は危険が多く、地域挙つての参詣旅で事故、災難に遭うと多数を失う事になり、また費用と日数も大きな負担であった為、費用を出し合い、少数の当番を参詣に送り出す代参講が普及しました。当番は道中の危険と日数を負担し参詣を果たすので、出立、帰着に際しては行事が行われ、地域は戸隠大神の御利益に与つたのです。

直江津でも同様の行事が行われており、叡山時代より戸隠の名に憶えのある聖人は、同じ天台宗の戸隠に改めて強い関心を抱いたと思われまふ。戸隠までは凡そ八十km、一日に歩ける距離が三十〜四十km程とすれば一泊二日の行程。中間地点の妙高辺りには袈裟掛けの松、大蛇渡りなどの伝承があり、聖人の宿泊地と想定されます。戸隠から二十km程先には善光寺があり、両詣が効率良く可能で、夫々に「壹百日間御参籠」の



高妻山頂に來迎された阿弥陀如来の図（中社 武井家蔵）

縁起が伝えられています。（親鸞聖人正統伝）では戸隠三十七日間、善光寺十七日間とされる。

『二十四輩順拝図会』全十巻。享和三年（一八〇三）初版発行。京都〜越後〜信濃〜常陸の旧跡などを紹介する。左は戸隠の項。



付近の旧跡

高妻山… 聖人参詣当時、奥社が在る戸隠山は表行場と位置付けられ、諸神仏湧出の霊窟「三十三窟」を拠点に抖擻行、籠山行などが行われていました。対して高妻山は裏行場とされ、岩壁に金剛界・胎藏界の曼荼羅を觀じ、峰路に十仏が配され、登拜により心身を浄化し、無垢の状態に戻る再生、蘇りの行場で、神仏に近づくことができる高位な霊山とされました。山頂には阿弥陀如来が配されていました。聖人は苦行の末登拜し、一心に読誦すると彼方の雲中より如来が來迎したと云います。こうした山中での体験こそが戸隠参詣の目的であったとされます。

余談ですが、高妻山は深田久弥が選んだ日本百名山の一座であるので、百座完登を目指す登山者は必ず訪れています。

念仏池… 越後道（越後から戸隠への参詣道で現在の黒姫〜戸隠間の旧道）沿いに在る小池。聖人が不思議な気配に誘われ林に踏み入ると、小池があつた。念仏を唱えようと、応えるように池底が湧きあがり、念仏を止めると鎮まる。戸隠権現の靈驗顯著と深く感謝し、念仏池と名付けたとされます。奥院（奥社）中院（中社）宝光院（宝光社）などでは、明治初年の神仏分離以降、僧侶の参詣を偲ぶ物は払拭され、所縁のものは見当たりませんが、越後の上杉と甲斐の武田の戦乱を避け、隣村小川の筏ヶ峰に三十年間戸隠三院を移した際、其の地に念仏池と称する小池を設けま

した。この池の再現ともされ、当時の戸隠一山が聖人参詣を重く見ていた証左と考えられます。御参籠宿坊… 戸隠では中院宿坊の中道坊行勝院（現在の当家）に滞在されました。高妻山上来迎された阿弥陀如来の図、聖人御影など、法宝物数点と縁起を伝えていきます。豊岡の桂の木・清水井戸… 有縁により数日間滞在された河原家を辞する際、妻が女人往生について尋ねたところ、聖人は携えていた桂の木の杖を庭に挿し、この杖が根付けた桂の木としてされました。やがて桂の杖はこの巨木となり、県の天然記念物に指定されました。また、聖人により井戸を得たので清水と改姓したとも伝えられます。



念仏池

竹内家… 長野市芋井影山の竹内家。聖人の戸隠〜善光寺参詣に際し道案内を務めたと伝えられます。

風越の峰・腰掛石… 長野市芋井荒安に風越の峰と呼ぶ地がある。戸隠・善光寺往還の小休止の地であり、笹の葉を重ねて六字名号を描き、随行者に念仏を説いたと伝われます。この笹文字を模した掛け軸が善光寺堂照坊に寺宝として残されています。

善光寺… 本堂内に親鸞松。境内に聖人爪彫り阿弥陀如来。松を捧げる聖人の銅像。堂照坊などがあります。

広まっていた善光寺信仰を教えに取り入れた様子も伺えます。

また、直江津から百五十km程離れた新潟市方面には「越後七不思議」と総称される旧跡が点在し、聖人の足跡とされている。不思議な伝承も多いが、聖人を迎えた地域の人々の強い敬慕の想いからか、八百年の長きに亘り、守り伝えられています。京都、越後、戸隠、善光寺、常陸の足跡は、宗祖親鸞、或は人間親鸞に遇おうと多くの人が辿って止みません。

聖人の御詠歌一首

此の山に百夜住居をなすならば 鏡も我を照らしたまわん

戸隠の杉間に移らふ月影は 心の玉を磨けとぞ思ふ

（戸隠神社講社聚長） 武井芳久



豊岡の桂の木